

草庵仏教

第136号

(発行日)

2001年10月1日

発行所：真宗大谷派念佛寺

〒6638126 西宮市

小松北町1-2-3

電話・FAX (0798)

41-5346

(発行人) 土井紀明

メール naridoi.ne.jp@lycos.ne.jp

http://members.tripod.co.jp/souan211

《 開法会ご案内 》

* 同朋の会 (念佛寺)
22日午後2時

.....
* 聖典講座 (念仏堂)
第1土曜日午後3時

* 念仏座談会 (念佛寺)
第3土曜日午後3時

自我中心の問題点

S 「よく(我が強い)とか、(我を張る)とか言いますが、(我)とは何でしょうか」

Z 「我とは自我あるいは自我中心のことですね」

S 「では、我が強いというのは」

Z 「自我心が強いことです。ただ、自我の強い人・弱い人はいませんが、凡夫は総じて自我中心の生き方といっているのです。『自己中』という現代語もそれですね」

S 「自我を中心に生きているという、その自我とは何ですか」

Z 「自我とは、これをしているのは自分だと意識しながらそれをしていく当のものです。また自我は、内外のいろいろな情報の中から価値判断をして取捨選択する機能でもあります。これが自我の一応の定義ですが、まあこんな難しいことは考えなくても、ふだん(私)として意識している当の私です」

S 「私たちが日頃(私)と想ったり、(私)と言ったりしているものですね」

Z 「ええそうです」

S 「自我がそのようなものだとすると、自我中心というのは、特別なことではないですね。ふだん私たちは私中心にものを考え、私を中心に行動しています」

から、一般に人は自我中心的に生きているということですね」

Z 「そうです。そういう自我中心の生き方をしていく者のごとを仏教では凡夫というのでしよう。自我いわば(私)のほかに自分自身というものを考えたこともなく、(私)と意識しているもののほかに(私)を知らないのが凡夫ですからね。そこをもう少し實際上で申しますと、自我中心ということは私個人の願望を中心に生きる姿だといえましょう」

S 「個人的な願望を中心に生きるというのはどういうことですか」

Z 「それは毎日私たちが私的に(ああしたい、こうしたい)、(ああなりたい、こうなりたい)、(ああ困る)という風に、自分にとって都合の良いものを求め、自分にとって都合の悪いものを嫌悪するということ、ふだんの私たちの態度です」

S 「もう少し具体的に言ってください」

Z 「たとえば、アメリカに留学したいとか、会計士になりたいとか、持っている株価が下がったら困るとか、難しい病気になったら困るとか、息子が手伝って

くれたら助かるとか、そういう個人の願望や欲求を叶えることを中心に生きようとするということです」

S 「それは普通皆やっていることですね。いろんな願望がありますが、そういう願望や欲求をもつてはいけませんか」

Z 「いろんな願望や欲求を持つことが問題ではなく、そういう私的な願望を中心に据え、自分の欲求を実現することを主眼にして生きようとする、そういう生き方が問題なのです」

S 「たとえば(我が強い)というのは、自分の個人的な欲求を是非とも叶えようとして、周りの人との間にいらざる摩擦(まさつ)を起こすような生き様(我が強い)といっているのですか」

Z 「そう思います。大体、自我をもとに生きようとする、欲深くなります。ああなりたい、こうなりたいという願望が主にありますから」

S 「食欲の煩惱ですね」

Z 「ええ。ですから、自我は欲深くなるだけまた怒りっぽくなります。なぜなら現実には自我の思い通りにならないことが多いですから、欲求不満が常にたまります」

S 「瞋恚の煩惱ですね」

Z 「瞋恚の煩惱が持続しますと、怒みや憎しみとなって心の中に沈殿(ちんでん)します」

S 「自分の思い通りに生きよう

とすると、人から邪魔をされたり、損害をこうむったり、反対されたり、非難されたりしますね。そうすると自分の利益や理想を妨害する人になりたいして怒りがおこり、憎しみとなり、怨みとなるのですか」

Z 「ダンマパダという経典に

『かれは、われを罵った。かれは、われを害した。かれは、われにうち勝った。かれは、われから強奪した』という思いをいだく人には、怨みはついに息むことがない』

とありますから、**自我は怨みやすいのですか**」

S 「怨みを抱きながら生きることは悲しいことです」

Z 「そうなんです。さらに、自我は常に他者と自分を比較する。自我というのは、自分が可愛いし、自分が認められたい。いつも心の中に(私が)(私を)(私に)と、私、私という意識が強いのですから、自分と相対する人が気になり、人と比較する思いが強くなります。そこで、**優越感や劣等感**にさいなまされま

す」

S 「仏教でいう慢という煩惱ですね」

Z 「ええそうです。自我が強いと当然、人より優位に立ちたいと思うようになります。ですから自分より勝れた人に対しては

ねたみ深くなります」

S 「自我は嫉妬深いのですね」
Z 「また、自我はいつでも自分を肯定しておりたい、肯定して生きられない」

S 「肯定しておりたいというのは、いつでも自分は悪くないと思いたい。そう思わなくては生きられない、ということですね」
Z 「自我はどんなに非難されるような行動をしてしまっても、どこかで（自分は悪くない）（自分だけが悪くない）（あいつも悪い）（社会が悪い）というように自己弁護し、自分をどこかで正当化しようとします」

S 「要するに、自我は何かにつけて自己肯定をしながら生きていくのですね」
Z 「ええ自分が悪くても素直に自分の非を認めず、自分の悪を承認しないのです」

S 「人に謝（あやま）っても、心の底から自分を悪いとは思っていない。どこかで（自分はそれほど悪くない）（あいつも悪い）という風に言い訳をします」
Z 「ええ。最後になりましたが、自我はいつも不安です。もともと自我というのは実体のないものです。ですから自我は私の全体を支えることはもちろんできっこありません。そこで自我は、外のものによって自我を支えようとしています。けれども外のものから自我を支えられません。ですからいつまでも自我は不安定で、人生に不安がつきま



うなぎ綿
(C)SHOGAKUKAN INC.

うのです」

S 「外のもので支えようとするというのは、例えばどんなもので支えようとするのですか」
Z 「財産とか才能とか夫とか子供とか、名譽とか地位などです。自我はそれらのもので自分を安定させようとして焦（あせ）りますが、外のもので自我を支えられませ

S 「なぜ、そうしたものは自我を支えられないのですか」
Z 「それらは無常だからです。つまり外のもので支えられませぬ」

S 「不安定なのですか」
Z 「そうすると、自我を中心として生きることはさまざま煩惱に苦しめられ、しかも人生そのものが不安定なのですか」
S 「そういうことだと思います」

S 「では自我（私）はどうしたら安定するのでしょうか」
Z 「自我（私）をこえて自我を包み、自我を根底から支えるものにであうことです。実のところ自我はそのまま悪というのではありません。この世を生きるのに自我は必要です。なぜなら自我は判断し取捨選択する機能ですから。ですけれど自我を中心

に据えて、自我に固着し、自我の欲求を先立って生きようとするのが問題なのです」

S 「自我（私）を支えてくださるものとは何ですか」
Z 「端的に言って、阿弥陀仏、南無阿弥陀仏です」

S 「阿弥陀仏とは」
Z 「かぎりない真実、智慧と慈悲の働きです。自我が阿弥陀仏に主人公の座をあげわたす、そういうことが始まるのです」

S 「いまままで自我が中心であったのが、阿弥陀仏に中心として生きる、そういう人生が始まるのですね」
Z 「ええそうです。そうすると、私の願望を叶（かな）えることを主にしていたのが、阿弥陀仏の願いに順う、いわば阿弥陀仏の本願を中心にして生きる人生に転換されてくるのです」

S 「阿弥陀仏に順うとは」
Z 「阿弥陀仏の願いが私の上に実現されてくること、それをこそ私の第一の喜びとし生き甲斐（がひ）とすることです」

S 「そうになると、自分の個人的な願いはどうなるのですか。新しい家に住みたいとか、いつまでも健康でありたいとか、もっと経済的に楽になりたいとか」
Z 「そういう願いはいつまでもなくなりませんし、あってもい

いんでしよう。しかし、阿弥陀仏の願いを中心しますと、個人的な願いをどうしても叶（かな）えないという確執がなくなってきました。なぜなら阿弥陀仏の願いに触れると今のままで有難いという満足感や安定感が与えられま

S 「自我中心となつて座を阿弥陀仏に引きわたすことが真宗の信心の内容にあるのですね」

S 「自我中心となつて座を阿弥陀仏に引きわたすことが真宗の信心の内容にあるのですね」

S 「自我中心となつて座を阿弥陀仏に引きわたすことが真宗の信心の内容にあるのですね」

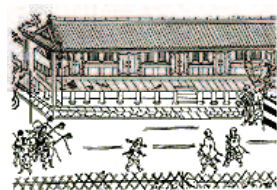
S 「自我中心となつて座を阿弥陀仏に引きわたすことが真宗の信心の内容にあるのですね」

S 「自我中心となつて座を阿弥陀仏に引きわたすことが真宗の信心の内容にあるのですね」

S 「自我中心となつて座を阿弥陀仏に引きわたすことが真宗の信心の内容にあるのですね」

S 「自我中心となつて座を阿弥陀仏に引きわたすことが真宗の信心の内容にあるのですね」

Z 「ええ、ですから諸師方は口をそろえて、弥陀をタノメ、弥陀にまかせよとお勧めなのです」
(了)



大矢数 I 1
(C)SHOGAKUKAN INC.

〈伍職つれづれ日誌〉

九月十三日。宝塚にて八組所長巡回。教務所長さんが変わられて初めての巡回である。本願寺の両堂の屋根修理の費用と賦課金については来年度に明らかが、賦課金については来年度に明らかとされるようである。夜は朋友会。T師の発表。討議にアメリカのテロ事件に関する話が盛んなされた。
九月十六日。宗議会議選挙のため妻と選挙のため教務所に行く。息子は先に済ませた。今度の選挙は激戦になり、おのずと宗議会議選挙に対する関心も高まり、その点はプラス効果もあったが、しこりも残ると思われる。
九月十八・十九日。同朋会館へ。
九月二十二日。念佛寺彼岸会。愛知県から浄土宗の僧侶の方が初めて来られ、法要後しばしお念仏を中心に話し合う。
九月二十八日。Nさんのお内仏移徙法要。Nさんの悩みを二時間ほど聞く。
九月三十日。芦屋の竹園ホテルでご法事。家にお内仏が無いからとのこと。ホテルでの法事は二度目。

歎異鈔 第十一章 第四講

誓願の不思議によりて、たもちやすく、となえやすき名号を案じいだしたまいて、この名字をとなえんものを、むかえとらんと、御約束あることなれば、まず弥陀の大悲大願の不思議にたすけられまいらせて、生死をいずべしと信じ、念仏のもうさるるも、如来の御はからいなりとおもえば、すこしもみずからはからいまじわらざるがゆえに、本願に相応して、**実報土に往生するなり。**

歎異鈔第十一章より

(現代語訳) 阿弥陀仏は、誓願の不可思議なはたらきにより、たもちやすく称えやすい南無阿弥陀仏の名号を考え出してください、この名号を称えるものを浄土に迎えようと約束されているのです。だから、まず一つには、大いなる慈悲の心でおこされた誓願の不可思議なはたらきにお救いいただいて、この迷いの世界を離れることができる信じ、念仏を称えるのも阿弥陀仏のおほからいであることを思うと、そこにはまったく自分のはからいがまじらないのですから、そのまま本願にかなって、**真実の浄土に往生するのです。**

第一章の初めに(弥陀の誓願不思議)とあり、(ここにも誓願不思議とあります。ここで誓願不思議とは(念仏往生の願)

のことです。このことをまず理解しておかないと、歎異鈔の中に何度も出てくる本願の基本的な意味が分からず、ひいては歎異鈔全体が分からなくなるのです。なぜなら、浄土真宗とは要するに「本願を信じ、念仏をもうさば仏になる」(歎異鈔第十二章)という教えだからです。

異義者が「なんじは誓願不思議を信じるか、あるいは名号不思議を信じるか」というような質問をすること自体、念仏往生の誓願を正しく理解していないからといえます。

念仏で助けるといふ誓願を信じていること、おのずからお助け下さる名号(念仏)を信じていることになっていきます。だから一つのことではありません。それを別なように思うのは誓願不思議のいわれを正しく心得ていないからであり、それゆえ唯円房はここで、弥陀の誓願の内容をあらためて示されるのです。

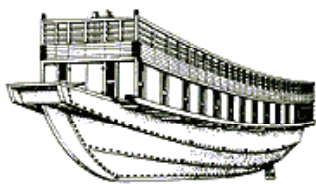
すなわち仏説無量寿経によりますと、法蔵菩薩は迷ひ苦しむすべてのものを助けようという広大な誓願を起させました。それは衆生をして真実を覚らしめ、清浄な智慧を完成し、限りなく他のものを救うていく大いなる慈悲の活動をなす仏陀たらしめたいという、そういうこの上ない恵みを万人に与えようと願われました。そしていかにしてこの願いを実現すれば良いかについて、長い間思案されたのです。その結果、万人を平等にすくう法を見いだされました。それは、一切衆生を浄土に生まれしめてこの上ない仏の証(さとり)を開く道において、この世の人生を安定せしめ、意味あらしめ、やがて浄土に生まれて仏となり、衆生の

救済の働きをまっとうしてゆく、そういう浄土往生の道です。

そこで、法蔵菩薩は一切衆生を浄土に生まれしめる法として称名念佛を選び取り、「たとえ十声なりとも念仏申すものを浄土に必ず生まれしめよう。さもなければ我も仏とはなるまい」と誓われました。

これが念仏往生の誓願といわれ、法蔵菩薩の第十八願とよばれています。法蔵菩薩はこの誓願の通りに衆生を浄土に往生せしめるため、永いご修行をされ阿弥陀仏となられたのです。阿弥陀仏として「弥陀成仏」されたことは、この念仏往生の願は空しくなったのではなく、この願のとおり衆生が浄土往生出来ることが保証されているのです。

善導大師は、大無量寿経の第十八願「たとい我、仏を得んに、十方衆生、心に至し信樂して我が国に生まれんと欲うて、乃至十念せん。もし生まれずは、正覺を取らじ。唯逆と正法を誹謗せんをば除く」という本願の文を解釈されて、弥陀の本願を「もしわれ仏にならんに、十方の衆生、わが名号を称すること十声に至るまで、もし生ぜずは、正覺を取らじ」と表されました。これを「念仏往生の願」といいます。いわば「名号を十声なりとも称えるものを浄土に生まれしめん」と



二形船
(C)SHOGAKUKAN INC.

誓われたのです。それを歎異鈔では「たもちやすく、となえやすき名号を案じいだしたまいて、この名字をとなえんものを、むかえとらんと、御約束あること」と述べられたのです。

ここで「たもちやすく、となえやすき名号を案じいだしたまいて」という点を強調してあるのは、ここに弥陀の大悲のお心が示されているからです。なぜここに阿弥陀仏の大悲が表されているかについて身をもって深くいだかれたのは法然聖人でした。このことは法然聖人の主著「選択集」の本願章に詳しく述べられています。その中で

「もしそれ造像起塔をもつて本願となさば、貧窮困乏の類はさだめて往生の望みを絶たん。しかも富貴のものは少なく、貧賤のものはなはだ多し。もし智慧高才をもつて本願となさば、愚鈍下智のものはさだめて往生の望みを絶たん。しかも智慧のものは少なく、愚痴のものはなはだ多し。もし多聞多見をもつて本願となさば、少聞少見の輩はさだめて往生の望みを絶たん。しかも多聞のものは少なく、少聞のものはなはだ多し。もし持戒持律をもつて本願となさば、破戒無戒の人はさだめて往生の望みを絶たん。しかも持戒のものは少なく、破戒のものはなはだ多し。自余の諸行これに准じて知るべし。まさに知るべし、上の諸行等をもつて本願となさば、往生を得るものは少なく、往生せざるものは多からん。しかればすなはち弥陀如来、法蔵比丘の昔平等の慈悲に催されて、あまねく一切を撰せんがために、造像起塔等の諸行をもつて往生の本願となしたまはず。ただ称名念仏一行をもつてその本願となした

まへり」
と仰せられています。

法蔵菩薩は、もし仏像を作って奉納したり、塔を建てるなどの功德を積むことを浄土に生まれる条件にするなら、貧しく卑賤な人たちは落ちこぼれてしまうとお考えになったのであるうと、法然聖人はいわれるのです。

この当時、盛んに仏像や寺院が建立されましたが、そういうことの出来る人は裕福な貴族や豪族に限られていました。ですから、法蔵菩薩の誓いの中に仏像を造ることや仏塔を建てるなどの功德を積むなどの徳行を往生の条件とされなかったのです。なお法然聖人のこの言葉は、弥陀の本願は貴賤の差別を超えていることも表していました。

このようにして、智慧や高才(すぐれた才能)も浄土往生の条件にされませんでした。なぜなら愚鈍ものや才能のないものは往生できないからです。ここに弥陀の大悲は賢者・愚者を選ばず平等に救う慈悲であることが示されています。

また、多聞多見という知識や教養のあることを往生の条件にするなら、無学や教養の乏しいもの(少聞少見)は救いから除かれてしまいます。ここには学問の有無に関わりなく救いたいとの阿弥陀の慈悲が表されています。

また、仏教の戒律を守っているかどうかも弥陀の本願には問われません。なぜなら戒律を守る者は少数であり、戒律を破る者や初めから戒律を受けない俗人は多数だから、すべての衆生を救うために戒律の有無は問われません。

以上のことから知れるように、浄土往生に何か一つでもこれといった条件を

けるなら失格者が出来てしまい、弥陀の救済から漏れてしまいます。ですから阿弥陀仏は法蔵菩薩の時に「平等の慈悲に催されて、あまねく一切を撰せんがために、造像起塔等の諸行をもつて往生の本願となしたまはず」、「ただ称名念仏一行をもつてその本願とな」されたのです。

すなわち「ただ南無阿弥陀仏と称えよ。必ず浄土に生まれしめん」と誓われたのです。南無阿弥陀仏と称える称名念仏はだれでも、どこでも、いつでも、たやすく行える至つてやさしい行です。「称えやすき」名号です。だからお念仏は生活の中で持続しやすいのです。難しいことなら続きませんが、ただ口に南無阿弥陀仏と発音することは至つてやさしいことですから、続けることが出来るのです。そのことを「たもちやすく」といわれるのです。称えやすく、たもちやすい、それが称名念仏なのです。

「ただ口にナムアマミダブツと称えよ。必ず助ける」との誓願はこのようにして私たちに特別の資格や条件を求めず、要求もされない、ここに、阿弥陀仏が全ての者をさわり無く平等に救いたいという広大な大悲を示されているのです。

こう申しますと「聾哑者(ろうご)は念仏が申されぬではないか」と質問する人がいます。

実は「我が名を称えよ」という仰せは、称

えるのをすら条件とされない思し召しな

のです。「我が名を称えよ」という本願を聞いて、「口で称えねばならない」と受けとるのは、本願にこめられている限りのない大悲の仏心を、この仰せから受けとらないからです。この言葉は念仏を申す行いすら条件としない、いわば「そのままなりを助ける」という絶対無条件のお心を「我が名を称えよ」という仰せの上に阿弥陀仏は表されたのです。ですから、たとえ聾哑者であっても、「我が名を称えよ」と「聞く」だけで、そこに「このままの我を捨て給わない大悲」をいただくことが出来、そこに救いは現前するので

またある人は、「易い称名といえども、称える行いであるかぎり全く易行とはいえない」といわれますが、聖道門のさまざまな難行に対比すれば易行というのは自然です。なおな了解であり実感です。あるいは「易行とは、念仏の本願力回

東本願寺おみがき奉仕団募集

(期間)

- ①二〇〇一年十月三十日～十一月一日
- ②二〇〇二年三月十二日～三月十四日

(申し込みは念佛寺へ)

*御影堂や阿弥陀堂の仏具のおみがきと清掃奉仕をしながら、真宗のみ教えにふれていただきます。

*一人でも参加できます。希望者はおかみそりもできます。定員になり次第締め切り。

*費用は一六三〇〇円です。

*本山に二泊し、真宗教団の歴史を体感して下さい。

下さい。

東本願寺おす払い奉仕団募集

(期間)

- 二〇〇一年十二月十八日～十二月二十日
- (申し込みは念佛寺へ)

*御影堂や阿弥陀堂のお煤払い(すすはらい)の奉仕をしながら、真宗のみ教えにふれていただきます。

*一人でも参加できます。定員になり次第締め切ります。

*おかみそりはできません。

*費用は一六三〇〇円です。

*本山に二泊し、真宗教団の歴史を体感して下さい。

下さい。

称え

